

# 高校生と大学生の視点における 子育て(乳児)バリアフリーの実態

寺 田 清 美

## 一. 問題意識と目的

「バリアフリー」という言葉は、そもそも建築用語として登場し、建物内の段差や仕切りの解消等物理的障壁の除去という意味合いが強かった。その後、障害者が社会の中に人間として生きる権利を持ち、彼らの人権をこの社会に確保するという「ノーマライゼーション」の考え方から、1974年国連障害者生活環境専門会議において「バリアフリーデザイン」という報告書が出され、その中で“バリアフリー”という言葉が使用されるようになった。近年になって、特に障害者や高齢者に配慮をすることに多く用いられている。

1994年に高齢者、身体障害者等が円滑に利用できる特定建築物の建築の促進に関する「ハートビル法」、そして、2000年に高齢者、身体障害者等の公共交通機関を利用促進に関する「交通バリアフリー法」が制定された。

最近、福祉のまちづくりという考え方において、高齢者や障害者を含む全ての人々が地域に住み続け、働き、学び、遊ぶなど生活ができるように地域で支援する仕組みを整える必要性が求められている。しかしながら、子育て支援の生活環境整備において、バリアフリー化はまだまだ不十分であり子育てバリアフリーという表現も最近注目されてきたところである。その草分けともいえる野村歓等は2004年「地域環境における子育てバリアフリーの実態及び比較に関する調査研究」を行った。子ども及びその母親が調査対象になり、結果として既存の地域環境は「子どもに配慮した状況にはなっていない、親や子ども自身が様々な危険や不安を与えていた」と指摘した。しかしながらこの調査の対象は小学生の母親であり、高校生や大学生を対象とした研究は未だなされていない。そこで、筆者は近未来親になるであろう高校生や大学生を対象として子育てバリアフリーの実態を調査することにした。

2000年4月の中央教育審議会による「少子化と教育について」の報告においては、高校生が乳幼児とふれあう保育体験学習の必要性が指摘されている。中嶋明子等による「高校家庭科に保育体験学習者の意識変容」には、高校生が乳幼児に好意を持っているか否かに対し、体験学習前とその後は大きい変化が見られた。そして、その変容過程は経験の「質」に注目することを促すものであると示した。この「質」とは言い換えれば、生徒がどのような事柄に気づき、どのような情動的経験をしたかということであり、そのような生徒の学びの具体的な内容を捉えることが重要であるといえる。

筆者は2002年度、厚生労働省が、「赤ちゃんと中高生とのふれあい事業」のモデル事業を始めた際に推進者として参加した。それ以後、2003年度～小学校に毎月、2004年度～高校は毎週2時間、

「赤ちゃんとのふれ合い授業」を担当している。この授業を通し、同じ赤ちゃんとその母親に同じ生徒が1年間継続した関わりを持つことにより、相手への思いやりや、共感の意識が参加者の多くに高まることを体感してきた。

今回は、高校生が実際に赤ちゃんとその母親と一緒に地域に出かけ、高校生の視点から地域環境における乳児バリアフリーの実態を見る調査を行うことにした。お互いに関わって見ることにより、初めて気づくことの多い「赤ちゃんとのふれ合い授業」を地域環境の視点から探ってみた。今年同様に、その授業を大学生にも行った。

本研究では、高校生と大学生が実際に赤ちゃんを持つ母親と共に、その地域にある公共施設である駅、スーパーマーケット、郵便局や銀行商店街等を巡ることを通じて、地域環境における子育てバリアフリーの実態を明らかにし、調査による高校生と大学生の意識の違いなども探ることとした。

## 二. 研究方法

### 1. 調査対象

都内東京成徳大学高等学校幼児教育専攻「赤ちゃんとのふれ合い授業」受講生2年生女子24名

都内東京成徳短期大学幼児教育科2年寺田ゼミ受講生女子23名

### 2. 授業概要

高校生は、2005年4月から月に1～2回4組の赤ちゃんと抱っこする、観察するなどのふれ合い授業を受けた。そのプロセスにおいて、赤ちゃんの母親から子連れ移動中に困った事や有難いと感じた事等の話を聞き、自分達も母親と同じ体験をしてみたいという意識が高まる。そこで、調査目的を共通認識するために事前学習として、最近のまちづくりの動向や障害者高齢者を対象としたまちづくりの歴史的変遷と現行法におけるバリアフリー化のあらましの解説を受ける。また、乳幼児や子育て中の保護者に対し、まちの中では適切な環境が用意されていないことを、いくつかの実例をあげての解説を受ける。さらに、今後何が必要なのかを知ることができるよう、「問題点は何かをみつけよう」をテーマに、3グループに分かれて、予想できるバリアについて話し合う。その後、高校生は高校周辺の「郵便局」「地下鉄の駅」「スーパー」それぞれ3グループに分かれ、各グループは1組及び2組の親子と一緒に目的地に行き、乳母車を押す経験をする。

短大ゼミ生は事前学習終了後、短大付近の「道路、銀行、踏み切り」「十条商店街」「ファミリーレストラン駅周辺」の3グループに分かれ高校生と同様に親子と一緒に乳母車を押す経験をする。調査終了後、個別に感想を記入し、バリアフリーの実態についてグループごとに話し合い、実態と今後の課題を認識する。

参加親子は、調査日現在6ヶ月男児・女児各1名 5ヶ月女児2名の計4組の親子。調査日である6月20日：高校生と、7月8日：大学生いずれも同じ親子が参加した。

### 3. 分析方法

本研究においては、KJ法により感想文内容を分析することにした。

#### 1) KJ法とは

KJ法は、元東京工業大学教授である川喜田二郎が考案した創造性開発（または創造的問題解決）の技法であり、彼の頭文字をとって“KJ法”と名付けられている。この方法は、そもそも川喜田二郎が文化人類学者として自分自身の学術調査のデータをまとめ、また調査団のチーム作りのために考案したものであったが、その後、彼自身および周囲の研究者たちの協力によって、さまざまな発展型を生み出している。今日に亘って、KJ法は学問の研究方法として、日本社会

の各界・各層に幅広く普及し、大きな影響を与えている。

本来、この方法を行う際には4つの段階が設けられている。つまり、①情報収集のステップ、②グループ化のステップ、③グループ間の関係を図解化するステップ、④文章化のステップ。これらの段階の中で、最も重要なのは第3段階である。本研究では、①～③の3段階を利用する事にした。

## 2) 分析プロセス

### ①生徒のグループごとにカテゴリー生成

小さいカードに『街歩き感想のベスト5』を個別に書き込んだ。その後、似ている同士のカードを「実態」という欄に書き込んで、一つカテゴリーを作成した。また大学生と高校生が書いた数もそれぞれ集計した。

### ②全体的にカテゴリー生成

グループでまとめたカードを親と子どもという大きいなカテゴリーに分け、上位カテゴリーとして「便利さ」と「安全性」の2カテゴリー、さらに「便利さ」の下位カテゴリーとして「量的」、「段差的」、「サイズ的」、という3カテゴリーに、また、「安全性」の下位カテゴリーとして「大きさ」、「必要な設備」、「私有物の利用禁止」のカテゴリーに分けた。

## 三. 結果

### 1. グループごとにカテゴリーの生成

表1 グループごとにカテゴリー生成

項目	評価	人数 学生		現状・問題点	コメント	改善点
道路	利便性	大	2	①緑や花が植えられているところがある	お店の看板が歩道にはみ出している	
	高	0				
	不便性	大	13	①歩道に電柱がある ②放置自転車が多い・看板や針金	乳母車を押していくと振動を感じる・乳母車は少しの段差にも引っかかってしまう	①歩道の狭いところは、予め電柱を地下に埋めるなど工夫 ②無料駐輪所を作ったり、駐輪禁止の取り締まりを徹底する
	高	5	障害物			
	不便性	大	8	①道路が狭い ②でこぼこがある ③段差が多い ④グレーティングの網目に乳母車の車輪が填まる(写真1参照)	乳母車を押していくと振動を感じる・乳母車は少しの段差にも引っかかってしまう	①道路が狭いところは看板や電柱の設置、駐輪などを避ける。 またできるだけ歩道を作る ②③スロープをつける、舗装を行なうなど整備が必要 ④グレーティングの網目を細く変える
	利便性	高	10			
	利便性	大	0	①転落防止のドアがある(地下鉄南北線王子神谷)(写真5参照) ②エスカレータースロープがある(片方のみ)		
	不便性	高	1			
駅	不便性	大	0	①ホームが狭く転落しやすい	①転落防止のドアをつける	①両方につける。また、上り下り
	不便性	高	2			
	利便性	大	3	ホームの設置常時	①エスカレータースロー	

			使用できる設備	①普段が片側のホームにしかついていない ②喫煙コーナーから煙が漏れる ③自動改札が狭くベビーカーが通りづらい ④トイレなどの場所がわかりづらく利用しにくい	り両方欲しい ②囲いを作って、吸煙機をつける。または個室にする ③改札機の幅を広げる④ベビーキープ付きのトイレなど設備+場所の表示をマークを統一するなどしてわかりやすく表示する
踏切	利便性	大	0		
	不便性	高	0		
	利便性	大	8	遮断機の構造	①遮断機の下りる速度が速い ②電車が迫ってから警報が鳴るまでの間隔が狭い ③子どもには遮断機の下の高さが十分でない
	不便性	高	0		警報が鳴り急いで渡ろうとしたら、すでに遮断機は下りていた・電車も近づいていた
	利便性	大	9	道路としての機能面	①開かずの踏切 ②線路の溝の幅が広く車輪が溝に入りやすく乳母車を押す際の妨げになる(写真6参照)
	不便性	高	0		①②歩道橋や地下道を設け立体交差にする(踏切の廃止)
スープーマーケット	利便性	大	0	設備表示	①カートの形が子どもの喜びそうな形になっている ②トイレやエスカレーターの表示がある
	不便性	大	0	室内配置	①売り場の通路が狭い(写真2参照) ②手動ドアだと重い ③授乳室、オムツ交換台の設置が少ない ④授乳スペースが少ない
	利便性	大	0	環境	①冷房が強すぎる
	不便性	高	6		①室内温度を適温に調整する
郵便局・銀行	利便性	大	0	設備	①スロープがある ②郵便局内やATM周辺のスペースは広くベビーカーで移動しやすい
	不便性	高	2		本局の郵便局は①②の事がいえるが特定郵便局は違う
	利便性	大	4	室内配置	①待ち時間が長い ②しきりのロープの間隔が狭く、ベビーカーでは通りづらい ③自動扉の場合開閉が多く、室内の空気が逃げやすい
	不便性	高	5		①子どもが飽きずに待てるよう、絵本やおもちゃを用意する。赤ちゃん連れでも座って待てる優先席を設ける ②昼間など子連れが多い時間帯には、間隔を広げ通路に余裕を持たせる ③エアカーテンを設けるなどで、室温を一定に保てるようにする
		大	11	屋外	①入り口に段差がある②銀行の前にはたく
					①スロープを設ける②駐輪場を

		高	3	自転車がせっかくのスロープを塞いでいる（写真4参照）③トイレがない	さんの自転車が置いてあり、入り口をふさいでいる	きちんと区分けする
トイレ	利便性	大	9	機能環境	①女性用トイレは設備（ベビーシート、ベビーキープ）が整っている②店内のトイレに折りたたみベットがありおむつ交換利用できる	駅などに比べてデパートのトイレは、きれいで明るい
		高	2			
	不便性	大	4	機能環境	①男性用トイレにはベビーシートが少ない②施設外などのトイレは暗く、狭いところが多い③大きな建物、スーパーになるとトイレが隔階になっているところがある	①男性用トイレにもベビーシートなどを設置し、子育てに優しい環境にする②トイレの中はもちろん、トイレに行くまでの道も明るくする③建物内の全ての階にトイレを設置する
		高	5			
ファミレス	利便性	大	2	設備	①入り口までの階段横に車椅子用スロープがある（写真3参照）②女性用のトイレにオムツ替え台がある	スロープはベビーカーにも使用可能になると良い
		高	0		①幼児向けの玩具、絵本などがある。②メニューに幼児食がある	
	不便性	大	10	環境その他	①店内通路が狭い②トイレは、狭く使いにくい③禁煙席・喫煙席がはっきりと分かれていない④離乳食がない	入り口に子どもの喜ぶ玩具あり、幼児や母親に目を向けている環境である 赤ちゃん連れのお母さんが他のお客様を気にしている様子が感じられた。
		高	0			

さらに、全体的にカテゴリーを以下のように作成した。

表2 全体的にカテゴリー生成

安心	親	利便性	量的工夫（エスカレーター・エレベーターの増設）
			段差の工夫（階段や歩道から車道の低段差）
			サイズの工夫（トイレ・側溝の蓋の網の目）
	安全性	安全性	大きさ（トイレ・道路・通路・入り口）
			設備作り（歩道・電柱・植木・点字ブロック）
			公共施設・共有スペースを私有物として使わない
	乳児	乳児の体を配慮すること	手の届く場所に危険物を配置しない



↑写真1 乳母車の車輪がグレーチングの網目に填まる



↑写真2 乳母車と籠を持つと通路が狭く通り難い、



↑写真3 左側車椅子用スロープはベビーカーも使用可能だと良い



↑写真4 商店街多い放置自転車



地下鉄ホーム（転落防止ガードあり安心）



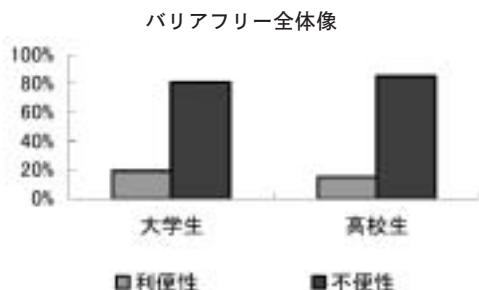
↑写真6 踏み切りの溝に車輪が入りこむ

## 2. 大学生と高校生が実感したバリアフリーの比較

### 1) バリアに関する全体像

表3 バリアフリー全体像

評価	対象	回答数(人数)
利便性	大学生	11(9)
	高校生	8(6)
不便性	大学生	47(23)
	高校生	46(24)



### I. 道路におけるバリアの比較

図2 大学生に意識された道路のバリア

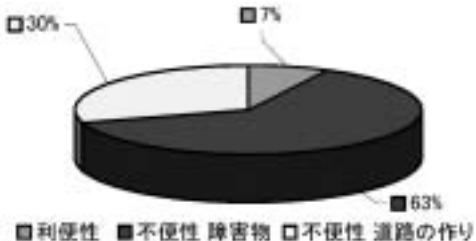


図3 高校生に意識された道路のバリア

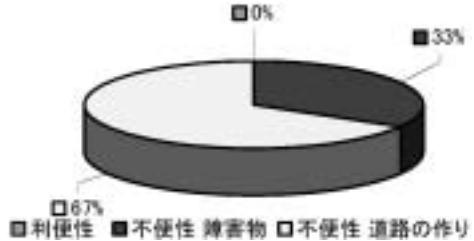


図2、図3から見ると、道路におけるバリアに関しては、大学生と高校生との差が大きかった。大学生の中で、緑や花が植えられているところがあると利便性を感じている人は20%占めたが、高校生には一人もいなかった。道路のバリアが存在すると感じた人が大学生にも高校生にも多かった。道路には障害物があり、赤ちゃんとその親が通る時にバリアがあると感じた大学生は63%に対し、高校生は33%であった。また、道路の作りバリアがあると感じた大学生が30%、高校生は67%を占めた。

### II. 駅のバリアに関する比較

図4 大学生に意識された駅のバリア

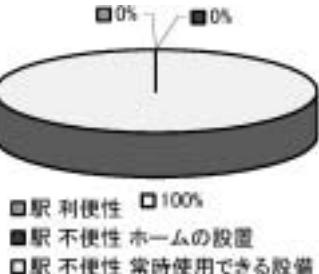


図5 高校生に意識された駅のバリア

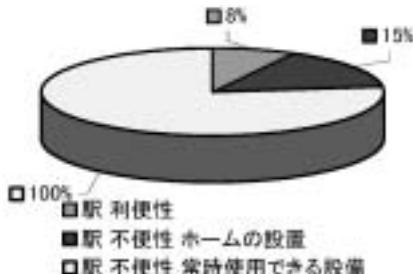


図4、図5の駅の観察に関しては、大学生は駅の周辺を見た程度であるのに対し、高校生は、改札口を通り、構内トイレの観察や階段をおり、ホームに下りるなどをしたため、駅に対する意識は高いようである。障害者用のトイレに鍵がかけられており、生徒が質問すると「鍵を開けておくと誰でも利用してしまうから」との答えが駅員から返ってきた。その時に赤ちゃんの母親が

「私達のようにベビーカーを利用している親子には障害者用のトイレの方がスペースがあり利用しやすいため、ぜひ鍵をかけないで頂きたい」

と、語ると、「これからはそのようにします」とはじめて気付いたように語る駅員の姿に、高校生はこのバリアフリー体験をした意義を感じた、と呟いていた。

### III. 郵便局&銀行のバリアに関する比較

図6 大学生に意識された郵便局&銀行

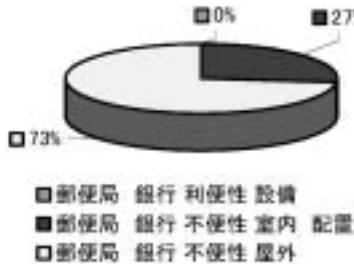
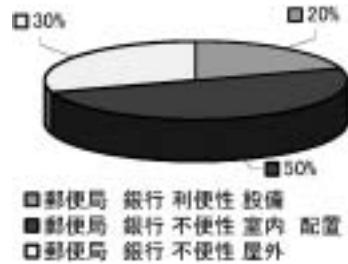


図7 高校生に意識された郵便局&銀行



大学生は銀行を、高校生は郵便局を観察した（図6、図7参照）。そのために多少のバリア意識の違いが見られる。

大学生は銀行の前に放置してある自転車の数の多さに驚き、駅前という立地条件もあろうが、乳児親子が利用するにはあまりに困難に近い状態であると気付き、自ら自転車整理を始めた学生がいたこのような姿は大学生ならではの姿かと考察する。郵便局には、入り口に長いスロープがあり、入りやすいこと、ATMの周囲や局内が広くベビーカーを利用して十分動けるゆとりが感じられその点が利便性20%の高校生が支持した。しかしこれは本局の郵便局のことであり、特定郵便局は、室内やATMの周囲にゆとりが感じられないというコメントがある。

さらに、両施設ともにトイレやベビーベット授乳コーナー等はなく、高校生大学生共に今後提案したいと共に認識した。

### IV. トイレのバリアに関する比較

図8 大学生に意識されたトイレのバリア



図9 高校生に意識されたトイレのバリア



■利便性 機能 環境 ■不便性 機能 環境

■利便性 機能 環境 ■不便性 機能 環境

大学生は、女性用トイレが設備の面でベビーシート、ベビーキープが整っていることや店内のトイレに折りたたみベットがあり、おむつ交換利用できる利点をあげている。高校生は、駅構内のトイレやスーパー・マーケットのトイレ環境から、トイレの中はもちろん、トイレに行くまでの通路も明るくすることを提案している（図8、図9参照）。両者共に、建物内の全ての階にトイレを設置することや男性用トイレにベビーシート、ベビーキープが整備される必要性をあげた。

## 四. 考察

### 1. 高校生と大学生の子育てバリアフリーに関する意識の高まりがみられる。

近年、核家族化の傾向にある社会の中で、高校生と大学生は乳児を持つ親子と接する機会がない。乳児親子に対する関心、思いやりなども当然のように持っていたいなかった。さらに、地域環境における子育てバリアフリーの存在も知らない。しかしながら、今回の授業を通じて赤ちゃんとその母親が身近な存在になり、「赤ちゃんが可愛い」「お母さんは大変」などのコメントが聞かれ、気付いた事へのメモも沢山記入されている。そして、「普段普通に歩いている道路や階段などに関して、赤ちゃんとその母親と一緒に歩くことによって、多くの子育てバリアフリーが存在していることに気付くと、いう事がこの授業内容の意義が生徒や学生に伝わるのだと考察する。

今後、将来社会人になり、いずれ母親になる彼女たちは、この体験を生かし、子育てバリア改善を行政に提案したり、地域子育て環境改善のためのリーダー的存在になるであろうと予測される。さらに、今回の調査は、将来日本の少子化現状を緩めるには多少の意味があると思われる。

### 2. 高校生と大学生の地域環境における子育てバリアフリー意識の共通点と差異点

#### 1) 高校生と大学生の共通点

##### ①ベビー乳母車を押してみての 気付き

実際にベビー乳母車を押してみないと不便さに気がつかない。(押してみて、初めていろいろなことに気付けた)

意外と難しい。

振動を感じる。

慣れるまで不安

放置自転車は想像以上にバリアとなる。(写真4参照)

少しの段差でひっかかる→赤ちゃんが大きく揺れる→大きなバリアである。(赤ちゃんと歩くと特別な気持ちになる)

貴重な体験ができた。

#### 2) 高校生の視点

##### ①スーパー・マーケット

エレベータ・ベビーキープあり。

室温が低く、赤ちゃんにとっては寒い。トイレへの道が狭い

店内は小さい子どもが多く危ない。

値札が邪魔。貸しベビーカーがあるといい。

通路が狭くショッピングしにくい。(写真2参照)

赤ちゃんの手の届く位置に危ないものあり。

##### ②郵便局

トイレがなくて不便。ATMが広く使いやすい。スロープが長い。

##### ③道路

放置自転車が危ない。邪魔。車や自転車が怖い。

電柱や点字ブロックが邪魔になる。

赤ちゃんと一緒に歩くよりも歩くペースが遅くなる。

グレーチングの網目にベビー乳母車のタイヤがはまる。(写真1参照)

段差が多い。

#### ④赤ちゃん

重い。かわいい。泣いちゃった。楽しそう。元気。

散歩が気持ちいい。よく泣く、よく寝る。少しの衝撃では起きない。

笑っていた。キヨロキヨロしていた。ベビーカーにずっと乗っていられない。

パパとママがやさしくて幸せそう。

#### ⑤駅

ホームと電車の間にドアがあって良い。(写真5参照)

駅構内は結構不便。トイレなど分かりにくい。鍵がかけられていた。

エレベータに乗るために反対側まで行かなければならない。

#### ⑥感想

楽しかった。また遊びたい。赤ちゃんが欲しい。散歩が好きになった。

ベビーカーは重い。他の赤ちゃんの親と仲良くなれる。

いい勉強になった。腕の筋肉が付いた。乳母車が重い。

ベビーカーを押してみて、1人で歩くより大変。ベビーカーを押すのは大変。

### 3) 大学生の視点

#### ①道路

ベビーカーで歩道を歩いていると、子どもの目線にくる木の枝や雑草があり危ない。

枝を切る、危ない高さまで伸ばさないようにすることを提案する。また、雑草は、ロープでくくる、囲いを作るなど常に整えることを心掛ける必要がある。

#### ②踏み切り

踏み切りの線路の幅が広く、ベビー乳母車のタイヤがはまる。(写真6参照)

#### ③商店街

ハンバーガー店におむつ交換台のシールが貼ってあり分かりやすい。

お店の入り口にマットが敷いてあり、入りやすかった。

商店街のアーケードの役割は大きい(日差しが防げる、涼しいなど)。

商店街は良い(優しい人が多い、自転車に乗ったまま、あるいは店に入らなくても買物ができるお店が多い)。

店内に物がたくさん置いてあった。できるだけ床には物を置かずに、歩く幅を十分に確保すると良い。

子連れは、雨の日が大変なため、アーケードをつけ傘を持たずに移動できる工夫をする。

たばこを吸う場所が多いため喫煙コーナーを区切り、煙が広がらないようにする。

ベビー乳母車が通ることのできないお店が多い(100円均一店では階段を下りることができないため、スロープがあると良い)。

#### ④銀行

駅前ということもあり、入り口付近にある放置自転車が邪魔をして、乳母車で入り難い状態にある。(写真4参照)

銀行ATMの入り口が狭いため、入り口を広くすると良い。トイレがない。

#### ⑤ファミレス

車椅子用スロープがベビーカーにも使用可能であれば、ベビーカーを抱えながら階段を下りずにすむ。(写真3参照)

自動ドアの種類によって便利不便が変わる。

子育て支援に対応したお店が少ない。授乳室やおむつ交換台などを設置して欲しい。

ファミレスの中をもう少し乳児向けに作ってほしいと思った。

オムツ替えの台がトイレの中にあると良い。

#### ⑥その他の気付き

駅前の交差点では、点字ブロックが敷き詰められていて、その上を通過しないと横断できない。点字ブロックの上を通過する時に振動があり、赤ちゃんの首や身体への影響はないか心配になった。

一つ一つの行動に慎重になった。

暑かった（赤ちゃんの体調も気になった）。

親の大変さを感じた（重い荷物など）。

いろいろな人に赤ちゃんのかわいさを知ってほしい。

赤ちゃんは同じ体勢でいるとぐずりだす。

赤ちゃんは外気温が高いと、ぐったりする。

施設改良も大切だが、赤ちゃんとお母さんを温かく見守る社会に変わってほしい。

#### 4) 高校生と大学生の差異

高校生の感想「ベスト5」は一言感想が多く、「楽しかった、また遊びたい、赤ちゃんほしい、散歩が好きになった、他の赤ちゃんの親と仲良くなれる。パパとママがやさしくて幸せそう」など、素直な気持ちが現れている。高校生が赤ちゃんと出会いふれあいの授業を何度も継続する中で、芽生えた愛着感情や「私の赤ちゃん」と一緒にベビーカーを押しながら歩いて得た気付きは、地域福祉行政への提案も幾つか含まれてきていて、今後の彼女達の行動に期待が持てそうな予感がする。

それに対して大学生は、赤ちゃんの首や身体への影響を気遣う感想や改善点の提案。さらに、いろいろな人に赤ちゃんのかわいさを知ってほしいや施設改良も大切だが、赤ちゃんとお母さんを温かく見守る社会に変わってほしいなど、社会に対する意見も伺えた。離乳食への提案や車椅子用スロープはベビーカーにも応用できないかなどの視点は、乳児保育を学んできたことが生かされていると考察する。

### 3. 地域環境における子育てバリアフリーの改善の提案

本研究では、地域環境において、とりわけ乳児とその母親のためにバリアが存在していることが明らかになった。具体的には、次の点が挙げられた。①地域環境は放置自転車や段差が多く、乳児を持つ親子に配慮した状況はない。②乳母車を押してみると予想より重く、大回りの動きになり狭い歩道は歩き難い。③乳児にとって手の届く位置に看板の針金等がある。安心して歩ける発達が阻害されない環境づくりが望ましい。④地下鉄の障害者トイレに鍵が掛けられていた。歩道に延びすぎた植木の枝は乳児の目の高さで危険である。福祉に配慮したまちづくりは行政側に任せることではなく、私達一人ひとりの提案が必要である。今後これらのバリアを改善する事により、安全・便利な福祉地域づくりが促進され、住民が安心して生活できることにつながると考察する。

また、この調査を通じて生徒や学生は、いつも急いで歩いていた道も、乳母車を押して歩くと、道路脇の緑環境で心が和み、赤ちゃんと一緒にいると地域の人が気軽に挨拶を交わして下さり、このまちは優しいと感じたという。これらの発見は高校生や大学生ならではの気付きである。「人と人との優しい関係を実は誰も求めていると思う」との意見も聞かれた。

最近、「心のバリアフリー」が問われているが、人的環境の重要性を見直すことにより、更なる、誰もが住み易い豊かなまちづくりができるのではないだろうか。子育てバリアフリーの改善はハード面に留まらず、ソフト面への配慮の重要性が高いと思われる。

## 提案

今後、安全かつ便利な生活環境のある地域には人が集まつてくる。特に出生率が年々低下している日本の社会において、子どもを産み育てこの街で住み続けて安心という思いが高まるためにもバリアフリーは必要不可欠といえるように考察する。

## IV. 今後の課題

自分の気付きや疑問を係員に積極的に質問する女子生徒の姿に、近未来の子育て環境改善のファシリテーターとなる期待を感じた。今後は高校生や大学生が地域子育て支援N P Oと共に複数の金融機関や商店街、公園や道路環境など子育て環境調査の地域を拡大する。さらに、男子生徒も加えて気付きの差異等を調査していく。

## 文 献

- 1) 野村歡・他 2005『地域福祉における子育てバリアフリーの実態及び比較に関する調査研究』こども未来財団
- 2) 中嶋明子・砂上史子 2004『高校家庭科における保育体験者の意識変容』日本家庭科教育学会誌第46巻第4号
- 3) 寺田清美 2005『高校生の視点から見る地域環境における子育て（乳児）バリアフリーの改善点』環境福祉学会論文集P20～P21